

連体修飾節のようで、連体修飾節でないもの
—日本語の連体修飾節のみなおしをかねて—

村木新次郎

1. 連体節とはなにか

連体修飾節 + 名詞

1. 1. 連体修飾部 単語、句、節の連続性

(1) 床は、ぬれた布でなく、乾いた布でふくものだ。

(2) 雨にぬれた石畳を歩く。

(3) 紅葉が霧雨にぬれている様子に感動した。

1. 2. 名詞の名詞らしさ

典型的な名詞

1 語彙的な意味をもっている

2a 補語になりうる (格の体系をもつ)

2b 規定成分をうける

非典型的な名詞

1 語彙の意味をもたない (形式名詞: 実質名詞と対立) 「こと」「もの」「ところ」…

2a 補語にならないもの (脱名詞化 → 後置詞・従属接続詞・述語補助詞)

2b 規定成分を(義務的に・任意的に)必要とするもの (非自立的な名詞)

・髪を切っている姿が、私には青い絵のように見えた。

・自分をあきらめる術 (すべ) を心得るようになっていた。

2. 連体 (修飾節) についての諸説

川端善明(1959/60)、奥津敬一郎(1974)、寺村秀夫(1975-78)、高橋太郎(1979)らの研究
村木新次郎(2007)

述語節 → ① 主節(終止節) 文を終止する節

② 従属節(接続節) 他の形式に接続する節

従属節 → ②-1 連体節 後続の名詞に接続する節

②-2 連用節 後続の用言もしくは文に接続する節

連体節 → ②-1-1 真性連体節 後続の自立的な名詞に接続する節

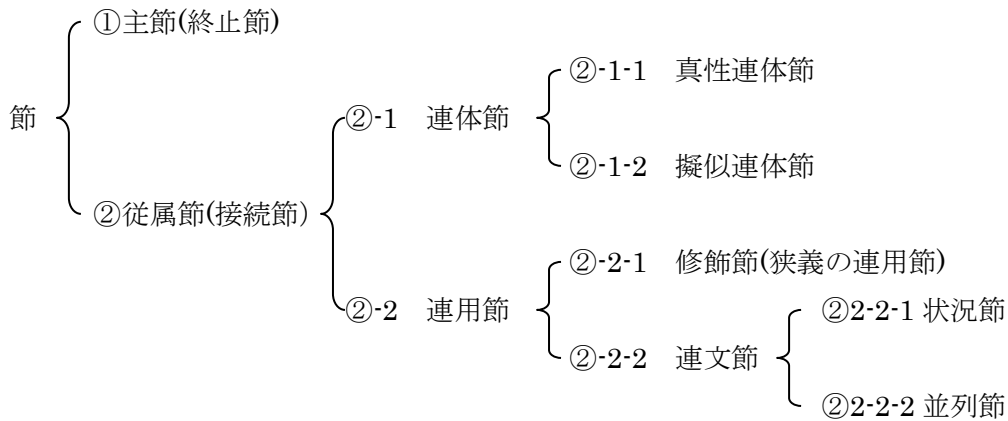
②-1-2 擬似連体節 後続の非自立的な形式に接続する節

連用節 → ②-2-1 修飾節(狭義の連用節) 後続の用言に接続する節

②-2-2 連文節 後続の節に接続する節

連文節 → ②-2-2-1 状況節 後続の節に接続し、意味的な限定をくわえる節

②-2-2-2 並列節 後続の節に接続し、意味的な限定をくわえない節



3. 疑似連体節の下位分類

②-1-2-1 {疑似連体節+名詞化指標} → 名詞相当節

名詞化指標 「こと」「もの」「の」「か」…

(4) 風もなく流れのほかはすべて静寂の中にその葉だけが一ついつまでもヒラヒラヒラ
と忙しく動くのが見えた。 (城の崎にて)

(5) ある朝のこと、自分は一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。
(城の崎にて)

(6) 彼は又、不意に道端からその女の立ち上がって来る事を繰り返し繰り返し想像した。
(真鶴)

(7) 海へ流されて、今ごろはその水ぶくれのしたからだを塵芥といっしょに海岸へでも
打ち上げられている事だろう。 (城の崎にて)

②-1-2-2-1 {疑似連体節+形容詞化指標} → 形容詞相当節

形容詞化指標 「よう」「そう」「みたい」「くらい」「ほど」「ばかり」「とおり」…

(8) 静香が逃げ出す先を、ひとつひとつ塞いでいくような、意志をもった雨音だった。
(彩雲の峰)

(9) ステンドグラスの遙か上空を、鳥か雲が渡っていったようだ。 (彩雲の峰)

(10) 司の顔から、砂が流れ落ちるように表情が抜け落ちた。 (彩雲の峰)

(11) ふたり並んで昇れないくらいの幅の狭い階段でした。 (錦繡)

(12) 部屋の中はもう真暗だった。タバコの赤い火が見えなかったら、そこに人がいるの
さえも、分らないくらいだった。 (路傍の石)

(13) どの邸宅も鑑賞用に作ったのではないかと思われるくらいに豪華だ。(若き数学者)

②-1-2-2-2 {疑似連体節+従属接続詞} → 副詞相当節=連用節(状況節)

従属接続詞：述語節をうけて、後続の節に対する関係をあらわす品詞性

名詞性：(+) 連体修飾をうける。(－) 格機能をもたない。

副詞性：(+) 広義の連用的にかかる成分を構成する(副詞節をつくる)。

(－) 連体修飾をうける。

接続詞性：(+) 先行する句・節を、後続の節につなげる。(－) 連体修飾をうける。

→ 擬似連体節をうける従属接続詞

(擬似連用節をうける従属接続詞もある。) → 「したがって」「つれて」「あたって」

【参考】文相当の形式を、後続の節につなげていく形式としては、(1)語尾、(2)(狭義の)接尾辞、(3)助辞、(4)従属接続詞、(5)副詞がある(村木新次郎(1991))。(1)～(3)は、広義の接尾辞に属し、単語内部の問題である。(4)は周近的な品詞のひとつで、中心的な動詞などの語形について、もっぱら文法的なはたらきをする形式である。(5)は従属節が副詞にかかるものである(少数)。

(14) 作業場にたてこもって、注文の鳥籠や茶器などをつくるかたわら、手ヒマをかけてつくったこの竹人形は、見事な出来栄えといえた。(雁の寺)

(15) 内藤は激しく羽草に迫ると、またボディを狙った。しかし、ノックアウトを急ぐあまり、大振りになり、羽草のブロックする腕の上を殴るだけのパンチになってしまった。(一瞬の夏)

(16) シャツをはぎとったついでに、バンドをゆるめて、ズボンの中にも空気を送りこんでやる。(砂の女)

(17) しかし『私に見せるためにそうしている』と考えたおかげで、すべてが逆転し、私は前よりも硬い心をわがものにした。(金閣寺)

(18) 芝っばらに、ひっくり返っているくせに、彼はなお、せり合う気持ちでいっぱいだった。(路傍の石)

(19) 大道具を駆使して飛び跳ねるわりには、あまり印象づけられなかった。(若き数学者)

(20) 父や母と衝突して飛び出した手前、そこへ行くのは屈辱でしかなかった。(二十歳)

単語	カテゴリー	<テンス>	<肯定否定>
かたわら		－	－
あまり・ついでに・とおり (に)		＋	－
おかげで・くせに・わりに (は)		＋	＋

4. 従属接続詞の諸相

4. 1. {擬似連体節＋従属接続詞} 後続の述語節に対する統語意味上の分類

<時間>をあらわす：とき(に)、おり(に)、際(に)、あいだ(に)、ころ(に)、ついでに、場合(に)、たび(に)、最中に、拍子に、途端(に)、はずみに、やさき(に)、かたわら、あげく(に)、そばから、しりから、……

<条件>をあらわす：とき、場合、たび(に)、まえ(に)、あかつきに(は)、……

<原因・理由>をあらわす：あと(に)は、すえ(に)は、結果、ゆえ(に)、ため(に)、おかげで、せいで、あまり(に)、くせに、手前、……

<目的>をあらわす：ため（に）

4. 2. 従属接続詞「かたわら」と「一方」の文法的カテゴリー(村木新次郎(2005))

文法的カテゴリー 従属接続詞	統語論的カテゴリー			形態論的カテゴリー					
	主語	時間的 限定	空間的 限定	ヴォイス	アスペクト	テンス	肯否	丁寧さ	ムード
かたわら	—	—	+	(+)	(+)	—	—	—	—
一方(で)	+	+	+	+	+	+	+	—	—

(注)「テンス」は、本来、終止用法におけるカテゴリーではあるが、「スル」と「シタ」の対立がみられるものを<テンス>としておく。同様に「アスペクト」も、「スル」と「シテイル」の対立のあるものをさす。

4. 3. <とき>をあらわす従属接続詞 (村木新次郎(2009))

(21) 作業場にたてこもって、注文の鳥籠や茶器をつくるかたわら、手ヒマをかけてつくったこの竹人形は、見事な出来栄えといえた。(雁の寺)

(22) 青雲堂主人が力をこめて朗々とよみあげるたびに、壇の後方の椅子に腰かけさせられている歐洲の妻千代子は、羞恥に堪えかねる思いがした。(楡家の人)

(23) 公園の中の売店で煙草とマッチを買うついでに、公衆電話から私は念のためにもう一度私の部屋に電話をかけてみた。(世界の終)

(24) 僕は筆記する手を休めて庭を見たが、赤いカボチャが目映った途端に涙が湧いて来た。(黒い雨)

(25) 結願の当日岩殿の前に、二人が法施を手向けていると、山風が木々を煽った拍子に、椿の葉が二枚こぼれて来た。(羅生門)

(26) 彼らは息をつこうとして口をあけたはずみにおぼれてしまったのだ。(パニック)

(27) 夫婦があきらめかけた矢先、不妊治療が成功して、ジヌオンが妊娠する。
(毎日 02.06.07)

(28) ふたりの話は、平さんとかいう男のことなんだが、ばくちをやっている最中に手はいって、その男は引っぱられて行ったのだそうだ。(路傍の石)

(29) 組合員らが商店街を盛り上げようと活動していたさなか、通りにあった大型店2店が前後して撤退。客足が次第に遠のいてしまった。(毎日 05.04.22)

(30) 「何だこら、何をぬかす。馬鹿も、休み休み云え。わしが広島から逃げ戻ったおり、あのとき小母はんは、わしの見舞に来たのを忘れたか。わしのことを尊い犠牲者じゃと云うて、嘘泣きかどうかしらんが、小母はんは涙をこぼしたのを忘れたか」(黒い雨)

(31) 退行は、何らかの困難やフラストレーションにぶつかり、乗り越えられなかった際、過去のやり方に逆戻りすることだ。(朝日 01.09.28)

(32) 石見銀山遺跡が世界遺産に登録されたあかつきには、噴水ジュースで祝杯だ。
(毎日 07.06.20)

4. 3. 1 動詞述語の内部構造

	ヴォイス	アスペクト	(テンス)	肯定否定	丁寧さ	(ムード)
かたわら	－	－	－	－	－	－
たび (に)	＋	－	－	－	－	－
ついでに	(＋)	－	＋	－	－	－
途端 (に)	＋	－	－	－	－	＋
拍子に	＋	－	(＋)	－	－	(＋)
はずみに	＋	－	(＋)	－	－	(＋)
やさき (に)	＋	＋	＋	－	－	＋
最中 (に)	＋	＋	＋	－	－	－
さなか (に)	(＋)	＋	－	－	－	－
おり (に)	＋	＋	＋	－	＋	＋
際 (に)	＋	＋	＋	＋	＋	＋
あかつきに (は)	＋	－	－	－	＋	#

(注)「テンス」と「ムード」は狭義には、発話の終止用法における文法概念である。ここでは、便宜上、従属節の内部にみられる「スル／シタ」の語形上の対立のあるものを「テンス」、「スル」「シヨウトスル」の語形上の対立のあるものを「ムード」としておく。「あかつきに (は)」は仮定条件のムード的意味をもつ。

4. 3. 2. 従属節の文法的意味

	文法的意味	アスペクト性	タクシス
かたわら	ある行為をしている<同時帯に>別の行為をすることを予告する。	無関与	(ひろげられた)同時性
たび (に)	ある事態が成立すると、<いつも>別の事態が成立することを予告する。 ある事態が成立するにつれて、別の事態が<次第に>進行していくことを予告する。	反復相	同時性 (反復・多回性) 継起性 (反復強意性)
ついでに	あることを {する／した} ことを<好機>として、別のことを行なうことを予告する。		(ひろげられた)同時性
途端 (に)	ある事態が成立 {する／した} <直後>に、別の事態が起こることを予告する	瞬間相	同時継起性 (直後)
拍子に／で	ある事態が成立 {する／した} <直後>に、(それが<きっかけ>となって)、別の事態が起こることを予告する。	瞬間相	同時継起性 (+原因)

はずみに／で	ある事態が成立{する／した}<直後>に、それが<きっかけ>となって、別の事態が起こることを予告する。	瞬間相	同時継起性 (+原因)
やさき(に)	ある事態が成立{する／している／した／していた}<瞬間>あるいは<直前>に、予想する事態とは異なる別の事態が起こることを予告する。	瞬間相	同時継起性 (+予想に反する)
最中(に)	ある事態が成立{する／している／した／していた}<時間(帯)>を意味し、別の事態が起こることを予告する。	持続相	同時性
さなか(に)	ある事態が成立{している／していた}<時間(帯)>に、別の事態が存在することを予告する。	持続相	同時性
おり(に)	ある事態が成立{する／している／した／していた}<とき>を意味し、別の事態がおこることを予告する。未成立のことには使えない。	特定のAspect に偏らない	同時性
際(に)	ある事態が成立{する／している／した／していた／しない／しなかった}<とき>を意味し、別の事態がおこることを予告する。未成立のことにも使える。	特定のAspect に偏らない	同時性
あかつき(は)	<未来に>ある事態が成立すれば、別の事態が成立するであろうことを予告する。	無関与	

Aspect性

「かたわら」と「あかつき(は)」はAspectに無関与。「たび(に)」は<反復相><強意相>を、「途端(に)」「拍子に／で」「はずみに／で」「やさき(に)」は<瞬間相>を、「最中(に)」「さなか(に)」は、<持続相>を特徴づけている。「おり(に)」と「際(に)」は特定のAspectに偏らない。

<とき>から<原因・理由><条件>へ

「拍子に／で」「はずみに／で」は、<とき>にくわえて、原因・理由にかかわることもある。また、「おり(に)」「際(に)」は条件にかかわることもある。「あかつき(は)」はもっぱら条件にかかわる。

「やさき(に)」は逆接条件に関わる用法をもつこともある。ある事態が成立する<直前>に、<期待する事態とは異なる事態が起こることをあらわしている>といえないか。

(33) 結婚50年目の3月、「金婚式を」と会場を予約し、楽しみにしていた矢先、入院して4月には帰らぬ人となりました。 (毎日 02.03.12)

4. 3. 3. 多品詞性

	名詞	副詞・接続詞	後置詞	従属接続詞	述語補助詞
かたわら	+	-	+	+	-
たび (に)	-	-	+	+	-
ついで (に)	+	+	+	+	-
途端 (に)	-	+	-	+	-
拍子 (に)	+	-	+	+	-
はずみ (に)	+	+	+	+	-
やさき (に)	+	-	+	+	+
最中 (に)	+	-	+	+	+
さなか (に)	+	-	+	+	+
おり (に)	+	-	+	+	-
際 (に)	-	-	+	+	-
あかつきに	+	-	+	+	-

述語補助詞：述語に後接して、述語の文法的意味に関与する単語

(34) 森山真弓法相は会見で「(調活費疑惑は) 事実無根との結論が出ている」と述べたが、逮捕は三井被告がマスコミに接触しようとした矢先だった。(毎日 02.05.30)

(35) 迎えに来た妻が居酒屋の駐車場を間違え、有料駐車場に移動させようとした最中だった。(毎日 03.10.29)

(36) イスラム教徒にとって最大の宗教行事であるハッジ (大巡礼) を直前に控え、イスラムの守護者を任じる同国では武装勢力への警戒を強めているさなかだった。(毎日 04.01.30)

4. 4. <理由>をあらわす従属接続詞 「手前」「立場上」「関係で」の場合

	スル	シタ	シイル	シイタ	シイ	
手前	(+)	+	+	(+)	-	社会的・心理的 必然的な理由
立場上	+	(+)	+	(+)	-	社会的
関係で	+	+	+	+	+	原因・理由・目的 形容詞・名詞述語文にも

(37) 父や母と衝突して飛び出した手前、そこへ行くのは屈辱でしかなかった。(二十歳の)

(38) 「職員に『笑顔』と言っている手前、私が率先しないと」と笑顔で話す〇〇正男・日光駅長 = JR日光駅で (朝日 05.04.23)

(38) 「生徒を指導する手前、結果を出さなければという気持ちがあった。」(朝日 04.09.04)

(39) 厳しい言葉は協会の看板力士を預かる立場上、無理もない。(朝日 04.03.17)

(40) 今井氏の陣営も「総務副大臣を務めている立場上、今回の決定はやむをえない」と話

している。 (朝日 05.08.24)

(41) 関西学生アメリカンフットボール連盟は、京大側の決定を尊重する意向だ。ただ、日程を決める関係で、5月中には秋季リーグに参加するかどうかを決定するよう求める。

(朝日 06.01.31)

(42) 物産と観光は切り離せない関係で、アンテナショップの開設でその相乗効果が期待できる。

(朝日 04.06.03)

【用例】

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(新潮社)／『朝日新聞』(朝日新聞データベース「聞蔵」)／『毎日新聞』(毎日新聞総合データベースサービス)／志賀直哉『小僧の神様他十編』(岩波文庫)／高樹のぶ子『彩雲の峰』(新潮社)

【文献】

奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』(大修館書店)

奥津敬一郎ほか(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』(凡人社)

川端善明(1959/60)「連体(1)／(2)」『国語国文』京都大学文学部国語学国文学研究室

佐久間鼎(1940)『現代日本語の研究』(厚生閣)

佐久間鼎(1955)『日本語のかなめ』(刀江書院)

鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』(むぎ書房)

高橋太郎(1979)「連体動詞句と名詞のかかわりについての序説」言語学研究会編『言語の研究』(むぎ書房)

寺村秀夫(1975-1978)「連体修飾のシンタクスと意味—その1/その2/その3/その4—」『日本語・日本文化』(第4/5/6/7号)大阪外国語大学留学生別科

三上章(1953)『現代語法序説—シンタクスの試み—』(刀江書院、くろしお出版から復刊)

三上章(2002)『構文の研究』(くろしお出版)(1959年、東洋大学に提出した学位論文)

南不二男(1974)『現代日本語の構造』(大修館書店)

南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』(大修館書店)

村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』(ひつじ書房)

村木新次郎(2002)「日本語の文のタイプ・節のタイプ」『現代日本語講座 第5巻 文法』(明治書院)

村木新次郎(2004)「従属節の構造と体系」『2004 日本言語文化教育と研究国際シンポジウム 予稿集』(中国日語教学研究会)

村木新次郎(2005a)「擬似連体節をうける従属接続詞—「かたわら」と「一方(で)」の用法を中心に—」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』5

村木新次郎(2005b)「<とき>をあらわす従属接続詞」『同志社女子大学学術研究年報』56

村木新次郎(2007)「日本語の節の類型」『同志社女子大学学術研究年報』58

村木新次郎(2009)「日本語の<とき>をあらわす従属節の構造」(『2009 中日理論言語学国際フォーラム』発表資料)